

栗原 彬氏

「フィールドを持つと問題も自分の位置もはっきり見えてくる」。データ集めのためでなく、場に身を置くこと自体に価値を見いだし、「受苦が現れるところに立つ」という方法論で社会状況を分析する。

題材は多岐にわたるが、現実の様々な摩擦に直面し、それを思考の糧にする姿勢は一貫している。

例えば、水俣。資金難でついでに「水俣大学」構想にもかかわった著者は、ここで市民運動の概念を揺すぶられた。患者を最も苦しめたのは、一般の水俣市民が手ツソ擁護のため反・患者の運動を展開したことだったからだ。

さらに深い示唆となったのは「死んだ子を返せ」と

いう被害者の叫びだ。感情論と一蹴（いっしゅう）さへと連なる魂の世界の破壊れかねないこの叫びに秘められたロジックを著者は考えた。その子の非業の死は、海が織りなした生命系の破壊でもあった。

「患者に同情的な人でも、ふたつのエッセンスを抽出

摩擦に身をさらし、社会みつめる

する。まずは「公共の福祉」と個人や地域社会の「自己決定の権利」との対立構図。著者の脳裏では、住民投票が実施された神縄の基地や新潟の巻原発の問題が水俣に重なる。



（くりはら・あきら）政治社会学
者。1936年栃木県生まれ、東京大学社会学部卒業、同大学院社会学部教授。「やさしさのゆくえ＝現代青年論」「政治のクロア」など著書多数。

もう一つは近代の価値観自体にかかわる問題意識。その議論の核心部に著者が据えるのは「宗教感情」という言葉だ。教義や教団に絡めとられる以前の、いわば、世界と自分を関連付ける原初的感情にまでかえった時、どんな展望が開けるのか。スピノザの汎神論、「すべての宗教は平等」という大本教の思想などを引きながら、新しい市民像をあぶり出し、それが作るネットワークに未来を見る。（新曜社・二、四七二円）